

series Salamander in the circle

# リ・コンストラクション

## 第四章

*Exciting vacation*

峯村 明



# リ・コンストラクション

登場人物

4・Exciting vacation

094.

095.

096.

097.

098.

099.

100.

101.

あとがき

奥付

## 登場人物

桧山 健	21歳の大学生
カヤ&アイラ	ホテル《ミッドランタ》の管理人夫妻
レル・ヴァリス	16歳の医学生
マックス・ペイリー	古生物学を専攻している大学生 25歳

## 4・Exciting vacation

094.

永遠の夏休みも半ばをすぎるところ。

カヤはどうしてアイラと結婚したんだろう？

「へ？ 俺？ いや、私っすか？ どうしてって……え〜と、それはその……成り行きですよ」

成り行き？

「俺もまさかこんなやつと！ って最初思ってたんですがね。いや、やつには内緒ですよ、やさしい顔してるけどけっこうこわいんだ」

……成り行き……ね

「オーナー、そんな、考え込まないでくださいよ〜。気がついたらいっしょになってたっていうか、そんなだったんで」

プロポーズはなんて？

「プッ……してないよ、してない、そんなもん、ぜったいしてない。……ああはずかしい」

ホームタウンでの日常は自分自身関わらねばならない煩雑な事柄が山ほどあった。結果、あとまわしにしてしまった事もある。

「そりゃそういうもんでしょ、目の前の事の方が大事だからね」

カヤはそう言う。

「それとも、大事だからこそ、あとにまわしたんじゃないの？ ……ねえ、オーナー」

ん？

「へへへへへへへへ」

なんだ？

「いやいやいやいやいや！ へへへへへ、青春だねえ！ ま、がんばりましょうや！」

はあ

「ところで今晚のメインはオーソドックスにビーフを焼くつもりですがね」

ああ、いいね。

「予約のお客が二名さま、そろそろチェックインするところですよ。さ、支配人、着替えて着替えて」

《ミッドランタ》はふだんカヤとアイラの夫婦が切り盛りし、数人のアルバイトが働いている。そこへオーナーの健がやって来たので支配人と呼ばれているわけである。

しかし、さしあたって、することはない。

そこでアイラが考えたのがディナータイムのウェルカムサービスだった。つまり、タキシードにボウタイで正装した支配人自らゲストにスパークリングワインを提供するのだ。

「思った通りですわ！ よくお似合いですよ！」

アイラは目を細めて手放しで褒め、カヤも真顔でうなずいてみせた。ふたりにそこまで褒め立てられれば悪い気はしない。すっかりその気になって前髪を立ち上げて後ろへ流し、オールバックにしてみたりする。姿見の前でためつすがめつし、なんてかっこいいんだ、と自画自賛し、フロアへ出勤する。

ゲストには歓迎と謝意を言葉少なく伝え、飲み物をサービスし、アイコンタクトをとり微笑を贈る。それだけの仕事だが、ゲストの驚きや歓びの反応がすぐに伝わってくる、なかなかおいしい仕事ではあった。

一巡してひと息ついていると、アイラがフロントへ出て行った。宿泊を予約したお客の到着だ。どれ、ついでに挨拶しておこうと、健もフロントへ。

そこにいたのは――

巨大なワニ――

の、ぬいぐるみをかかえた大男。頭には黒いアクブラハット<sup>1</sup>、ワニ革のチョッキを日に焼けた素肌にしかに着、擦り切れたジーンズ……

クロコダイル・ダンディだ――

---

<sup>1</sup> 映画『クロコダイル・ダンディ』で主人公がかぶっている帽子はアクブラ社製。  
"THE CROC"というモデルで、本物のクロコダイルの革と歯でできたバンドを本体に巻いている。

095.

アイラが半分顔をひきつらせて、毎度ありがとうございます、というようなことを言っている。ということは、クロコダイル・ダンディは常連なのか！？

と、「あれ！？」とダンディが頓狂な大声をあげた。「あれ？ もしかして、ヒヤマか！？」

「まさか——マックス・ペイリー？」

大男は帽子をとった。無精ひげの日焼けした顔がにこにここと笑っている。「お、やっぱりそうか！なにやってんだ、おまえ、そんなカッコして」

「あら、お知り合いですの？」と、アイラが健を振り返る。

「あ～え～と、まあ～」

「マダム・アイラ、ひょっとしてディナータイムにこいつがマジックショーでもやるんですか？」

アイラはにっこりとお客を睨んだ。「紹介しますわ、ペイリーさん、彼は《ミッドランタ》の支配人です」

ええっとびっくりしているクロコダイル・ダンディ＝マックス・ペイリーのかけにもうひとりいた。ペイリーと同じ黒いアクブラハットからきれいな金髪をのぞかせている、清潔な白いシャツの——

「きみは！ レル・ヴァリス！？」

\*

「カカドウを探検したら、こいつがワニに襲われててな」

「そうなんだ、ペイリーが通りかからなかったら、喰われてるところだった。ペイリーって凄いだよ、素手でワニをやっつけちゃうんだもの。ぼくはすっかり彼のトリコになって、さっそくお揃いの帽子を買ったんだ」

「ふーん……」

マックス・ペイリーは古生物学を専攻しているやつだからカカドゥのようなワイルドな土地はお似合いだが、レル・ヴァリスは妙なやつだと思う。ワニに襲われようが泥水にまみれようが、そういうのをものとしないらしい。清濁併せ呑んだところで、清いままなのだ

一人旅だったペイリーとカカドゥで意気投合し、ペイリーもツアーに加わって共に荒れ地を土埃をけたててランドクルーザーで南下、ウルルーを眺め、夜営して伝説的な天の川を観察し、アリス・スプリングスでツアーと別れてペイリーと列車に乗ったのだという。インドア派の健は聞くだけで目まいがする。

「ぜんぶこいつの立案。俺はついてまわっただけ。おい、レル・ヴァリス、おまえ未成年だろ！？ そんなにワイン飲んだらひっくり返るぞ！！」

慌てるペイリーをよそに、当のレルは、平気だよ、アデレードヒルズのワインはいけるね、なんて言っているのだった。

あとで桧山とふたりになったときに、ペイリーはこっそりと言った。  
「あいつ、モナシュ大の医学部なんだぜ、その前はヘルシンキ大医学部に十五で入ってる。まったく！ 頭はいい、性格はいい、マスクはいい、行儀もいい、ときた。アルコールもいくら飲んでも平気らしい。未成年だから運転免許はもってないけどさ。こう、なんでもござれ、だとも力ついてくるね。でもって、さすがに女はまだだろう」と意味ありげに眉をあげる。「と思ったら。なんとまあ、くんに婚約者がいるんだとさ」  
「それも年上の彼女で、すげえ美女。なんでも親同士が決めた相手だってんだが、それにしたって。恐れ入りましたって這いつくばりたくもなる」

ペイリーはそう言って笑った。彼は陽気にレル・ヴァリスを褒めたたえているのだ。

「俺はやつとは九つも違うせいかな、なんだか弟みたいでな、放っておけないんだ」  
「あんなふうに、出来がよくて、何でも持ってて、異様に頭のいいやつの中には、この世界はどう映ってるんだろうなあ」

\*

ところで、マックス・ペイリーはアデレード市内の大学に在籍中でやはりアデレード市内に住んでいるのだが、《ミッドランタ》を常宿にしているのはなぜだろう。



「それはだな、俺はアデレードヒルズのワインの大ファンなのだ。ワイナリーで飲んでたら、市内で経営してるホテルではリーズナブルにワンランク上の料理とワインが楽しめるというじゃないか。それで《ミッドランタ》に月に一度は通うようになってしまった。《ミッドランタ》って名前も気に入った。俺はここのレストランの常連であって、常宿にしてるわけじゃないやね。今日はレルと一緒に来たからふんぱつして泊まることにしたのだ」

「フリンダース大・古生物学の俺と、サウスオーストラリア大・経営学の桧山がなんで知り合いなのかというとな。ふふふ。今こそ明かそう、そのワケを」

マックス・ペイリーはここで急に声を落とした。そして、聴こえないような声で囁いた。(我々は、超古代文明同好会の同士なのだ！)

レルの目が、点になった。それから、「超古代文明同好会！？」

(ばかー！ 声が高い！！)

(あ、ごめん。え？ 超古代文明で、あの？)

(そうだ、アレだ、いいかでかい声で言うんじゃないぞ)

(わかった言わないよ。だけど、えー！ ケン、きみも、なの？ えー？ほんとに？)

意外にもレル・ヴァリスが目を輝かせて食いついてきたので、場所を移すことにした。なんたって、この話題は衆目……耳か……のあるところでは話しづらいのだ。

096.

場所を移すといっても同じ建物のなかの、健の部屋。三人はそれぞれ気ままに手足を伸ばしている。

「この話題がなにゆえ人目をはばかるかというと」ペイリーは、とん、とワイングラスをテーブルにおく。「俺のように正統派の研究者を目指す者が属す世界、すなわち、アカデミックな世界からすると異端であるからだ」

ふむふむ、とレル・ヴァリスは興味深げに聴いている。

「古生物学専攻ってっても、学ばにやならんことは、やまほどある。人類の進化、地質学、考古学、気候変動、etc。いずれにしても、目で見て、触ることができるものから掘り下げていくわけなんだが、どうしてもわからん部分でのにぶち当たるわけさ。その最たるものが人類進化のミッシングリンクだったりする。

だが、現に我々はここに存在する。祖先がいて、我々が存在する。その間に目に見えないモノがある。一説には、宇宙人が祖先のDNAをいじったのだというのがある。むろん、学会からは無視されてるが、俺にいわせればひじょうに興味深い。だって、否定できないじゃないか。

ほかにもいろいろあるぞ、ピラミッドは誰が造ったのだ？ 世界のあちこちにある巨石建造物はどうやって造られたのだ？ ストーンサークルは？ それらに共通する天文学の知識は誰が極めたのだ？ おそろしく精密で長い古代のカレンダーは？ 古代人が石槍で獣を追いながら創ったのか？

——先行する文明の所産じゃないのか？

そうとしか、考えられない。

しかしどーゆーわけか学会という世界では、一万二千年より前には地球上に文明はなかったことになってる。人類の進化も、地質学も、考古学も、あらゆる学問がその前提で積み上げられているから、前提がまちがっていたとしたらどうなる？ 積まれたものがぜんぶ崩れてくる。考えただけで恐ろしいわ！ そりゃあ、無視したくもなるさ！ ミッシングリンクの正体は宇宙人だなんて言いだしたヤツの口を塞いで袋叩きにするのが最善の道なのさ。おおぜいの、有形無形の利益のためにはな」

「なあ。ある説が、正しいかどうかは問題じゃないんだ。利益になるかどうかなんだ」

ペイリーは自分でボトルからワインを注いだ。

「だから超古代文明なんて、うっかり口にできないわけさ。ヘタをしたら、袋叩きにされて口を塞がれ、ついでに息の根を止められちまう。実際、おれの知り合いにおそろしくえげつない目に遭ったのがいるよ。気の毒に、音信不通になっちまった」

「それで——きみたちは同好会と称してこっそりやってるってわけか」

レル・ヴァリスはひそひそと言った。ほかに誰もいないのだからそんな必要はないのだけれども。

「でも、どうして？ きみたちは大学も違うし、専攻分野もちがうでしょ？ 接点なさそうなんだけど。どうして知り合ったの？」

「お、それはだな、図書館だ。こいつのサウスオーストラリア大と俺のフリンダース大とは図書館を共有してるんだ。どっちの大学の図書館を、どっちの学生が使ってもいいんだ。俺がサウスオーストラリア大で『ティマイオス』を読んだら、こいつが『クリティアス』を読んだのだ」

097.

「あ、ネコだ」ふいにレル・ヴァリスが言った。テラスからネコが二匹、にゃあにゃあ鳴きながら部屋に入って来た。

「お、かわいいなあ、子ネコちゃんたち、こっちへおいで。名前は？」

黒猫ともう一匹は茶色の地に斑(まだら)模様がある。珍しいスポッテッド・タビーだ。子ネコが生まれたと友人から聞いて見に行ったアイラが、そのままもらってきてしまった。つまり兄弟のネコだ。

「黒がバラムで、スポッテッドはバランケ」

二匹のネコはペイリーが持ち込んだワニのぬいぐるみをみつけ、毛を逆立てた。そしてあっという間に飛びかかり、爪で切り裂き歯で食いちぎって、たちまちばらばらにしてしまった。

「こらー！ なんてことするんだおまえらー！ 俺の大事なワニくんがミンチになっちゃったー！！」

ペイリーは怒り、ほかのふたりは顔を見合わせた。

「肉食動物の本能だろ」「正しい反応だよね」

ペイリーとレル・ヴァリスは予約してあった部屋をキャンセルし、好き勝手なことをいいながら二週間ばかり、健の部屋で寝泊まりした。そして三人でアデレードヒルズの葡萄園でピクニックをし、木陰でワインを楽しみ、海を見に行き、街へ繰り出してパブで夜遊びをした。どういふわけか、三人はふしぎと気が合うのだった。だから、アデレードに住む二人を残してメルボルン行きの飛行機に乗ったレル・ヴァリスを見送った時、それぞれがひどく感傷的な気持ちに

なっていた。こんな楽しいバカンスはもう二度と味わえないかもしれない。三人ともそう感じていたのだった。

ペイリーとはなんとなく別れた。彼とは会おうと思えばいつでも会える。別れた足で、健は大学の図書館へ寄った。そして久しぶりに『ティマイオス』を手にとった。云わずと知れたプラトンの著作で、アトランティスに言及している本だ。なんとなくページを繰るうち、手がとまった。プラトンの著述の通りに、同心円状にアトランティス大陸を図説したページだ。

そこをなんとなく眺めていると、携帯電話に着信があった。見れば、ペイリーからだ。『ティマイオス』を書架に戻し、図書館を出る。どうしたんだ？

電話がつながったとたん、「ヒヤマ！！」という相手の大声。  
「なんだ、どうした」

「たいへんだ、大事件だ！！ どうしてもブラジルへ行かにならん！！」

「落ち着けよ。ブラジル？ たいへんだな、気をつけて行けよ」

「うわーそうじゃねえよ！！ 俺、カネがないんだよ！！」

「——どうしても行かなきゃならんのに？ そりゃ困ったな」

「そうだよ困ってるんだって！！ だからヒヤマくん、カネ貸して」

「え」

「ブラジルまで往復の旅費。7000ドルばかし」

「70万円——」

「たのむっ！ こんなこと頼めるのは金持ちのあんたしかいないっ！！」

「訳を言えよ」

石灰岩の板が密輸されそうになったんだ、とペイリーは言った。場所はブラジル。

石灰岩を密輸??

——ただの石灰岩じゃない。古生物の化石が残ってるやつだ

——こういうのを欲しがってるやつがいるんだ。コレクターだな。密輸業者が勝手に石を切り出して、高値で売りつける。もちろん違法取引だ。警察はそういうのをすでに何千点も押収したらしい。それも今回見つかったのは、翼竜の全身骨格だっていうんだ!! 信じられん! 完全な全身骨格なんて、俺はまだ一度も見たことがないんだぜ!! 空を飛ぶための軽量化のせいで、翼竜は骨が中空で軽くてもろいんだ、簡単に壊れちゃうんだよ

——警察が押収したやつはサンパウロ大に送られた。俺はそれをこの目で見たい

ペイリーがそこまで喋った時、図書館の外で健と出くわした。電話越しに喋っているうちに、ぼつたりと顔を突き合わせてしまったのだった。携帯電話を切りながら健は言った。

「翼竜だって? 面白そうだな」

「——友よ——」

「ブラジルまでの往復の旅費、貸してやる。オレと一緒にいくから、逃げられんぞ」

「やな野郎だな」

\*

ブラジルまで行くのに、アデレードからの直行便はない。シドニーかメルボルンからの出発になる。

「メルボルンか……レル・ヴァリスに、声かけてみようか」

「お。俺もいまそれ考えた。気が合うな俺たち」

\*

「やつ、研究医になるっていう条件で親を説得してオーストラリアへ来たんだってさ。まあ未成年で学生だから親が出てくるのはしょうがないけどさ。俺、やつが研究に勤(いそ)しむって姿が、どうにもぴんどこないんだよな。もっとこう、アクティヴな何かが向いてると思うんだ。

何代も続く医者の家系だっていうし、実家や、親が決めた婚約者の存在も、窮屈なんじゃないかねえ」

「研究医になるためにオーストラリアへ来たんじゃないか、ないかもしれん。自由になりたかったのさ」

放っておけばペイリーはひとりで喋りつづけている。健はペイリーのレル・ヴァリス情報を聴くともなく聴いていた。

彼は、ずっと年相応にはしゃいでいたレルが、別れ際に淋しそうだったのが忘れられなかったのである。

## 099.

ブラジル北東部、アラリペ台地。密輸業者はここから石灰岩を持ち出した。

石灰岩とは、海棲動物の骨や貝殻などが長い年月をかけて堆積したもので、明確な化石を含んでいることが多い。水中に沈んだ生物の死骸は短期間で柔らかい泥に埋まり、低酸素状態に置かれて腐敗が進みにくなるからだ。

石灰岩が形成された主な時代、白亜紀、地球上には北にローラシア大陸、南にゴンドワナ大陸という、大きな大陸がふたつあった。

現代の地理から大まかにいうと、北米大陸東岸とユーラシア大陸西岸とが接していたのがローラシア、南米大陸東岸とアフリカ大陸西岸とが接していたのがゴンドワナ大陸である。インド、オーストラリア、南極大陸はゴンドワナの一部だった。ローラシアとゴンドワナの間にはテチス海という内海があった。

テチス海は広大な大陸棚で、赤道をまたぐよう拡がり、石灰岩の厚い層を造った。極東アジア、ヒマラヤ山脈、アルプス山脈、黒海、カスピ海周辺、地中海、さらには南米大陸の一部にも及んで、現代ではいずれも石灰岩を産出し、アラリペもそのひとつである。

アラリペの堆積層は化石が素晴らしい状態で保存されている。どれほど素晴らしいかというと、ふつう魚の化石は潰れて骨だけになって発見されるが、アラリペのは体に膨らみがあり、鱗や筋線維、内臓までが確認できる。

魚だけではない。翼竜もだ。もろくて繊細で壊れやすい骨格が丸ごと、関節も繋がった状態で、石灰岩のなかに納まっている。

そのように保存される条件を具えていた場所はひじょうに珍しく、滅多に人の目に触れない。見つけた研究者が「超高額宝くじに当たった！」というくらいの確率。

地球史上もっとも温暖だった白亜紀、かれこれ八千万年の間、世界のどこにも雪氷はなく、恐竜は大型化多様化し、陸海空、どこにでも彼らの姿があった。しかし今目にする化石は彼らの体の断片であり、彼らが生きた時代の断片である。

その彼らの体が丸ごと保存されている希少な石灰質の岩は、コレクターにたいへんな高値で引き取られ、発見者の農民と闇業者とは大金を得る。

100.

「個人の収集家の手に渡っちまった化石がどれくらいあるのか、想像もつかないんだぞ。コンフキウソルニス(孔子鳥)の化石は見つかったとたん大人気になって、80%もが国外へ持ち出されてしまったって話だ」

マックス・ペイリーは押し殺した声でうなるように言った。

「古代の生物がどんなだったか。どんな姿をしていて、どう成長して、どう進化したのか、それとも退化したのか。骨の断片から得られる情報はごくごくわずかなんだ。見てくれ、これはトゥパンダクティルスという翼竜の頭の部分の画像だ。

これだけみると、巨大な翼竜を想像するんだが——これを見ろ。今回見つかった化石の画像だ。サンパウロの友人が送って来た。合成じゃない、全身骨格だ。なんと、体高は1メートルしかなかった。

全身の3分の1が頭だったんだ。体に対して頭部が異様にでかい、ひどくアンバランスな、突拍子もないやつだった。

こんなのは全体像がなければわからんことだ。なぜそんな姿なのか？ 子どもなのか成獣なのか？ でかい頭にくっついてるでかいトサカはオスの求愛用なのか？ メスはどんなだったんだ？ いったい空を飛べたのか？ 疑問は際限なく湧いてでる。その答えがもしかしたらコレクターの持ち物のなかにあるかもしれないと思うと——」

マックス・ペイリーは翼竜を知りたくて古生物学の道を選んだという。ことにケツアルコアトルスの熱狂的なファンだった。

種類は違えど、翼竜の全身の骨格化石が闇業者の盗品の中から見つかったと知って、頭に血がのぼるのも当然で、ブラジルまでの空路の機内でぶつぶつとしゃべりっぱなしだった。

客室乗務員が眠っている客を気遣って、「Please be quiet」と作り笑顔でやってくると、レル・ヴァリスは「sorry」と、困った笑顔で応えるのだった。

## 101.

一行は無事サンパウロ大学にたどり着き、マックス・ペイリーが頭でっかちの翼竜の生々しい化石と感激の対面を果たしたところへ、レル・ヴァリスの携帯が鳴った。

なにやら込み入った話のようで、レルの表情が変わっている。夏休み中だというのに、どんな災いが降りかかったものか。

しばらくするとレルは健のところへやってきて、とまどいがちに「たいへんだ」という。ペイリーの次はこっちが大事件らしい。

「どうしたんだ、話してみろ」と促すと、レルはやはりとまどいがちに話し出した。



「医学部の教授が、この夏休み中に手術をすることになっていた。あ、教授はオペをする側だよ。二週間後のはずだったんだけど、予定が早まった。二日後だって。急なことでアシスタントが何人か間に合わなくて、ボクのところへ話がきたんだ。ボクは見学の希望をだしてあったから」

「見学じゃなくて、アシスタントを務めてくれってことか？ 凄いじゃないか！ なんだ、不安なのか？」

「いや……気持ちの問題じゃない。ぜひ手伝いたい！ でも、じつはボク……」レルは諦めた顔で肩をすくめた。「ポータウレアってどこへ、行ったことがない」

名前しか知らない、その地で手術だという。

「どこだ、それ」イタリア半島の東側でアドリア海に面したところにある、らしい。

「ブラジルから、ヨーロッパか……」

まあ、シドニー生まれのいいおとなが、初めてブリスベンへ行くのが怖いといっていたくらいだから、十六の少年が知らない土地への一人旅は不安だというのはもっともだった。しかも直通の航空便がなくて、途中で乗り換えなくてはならない。遊びに行くならそれも冒険のうちではあるけれども、レルは大仕事が待っている。よけいなストレスを抱えたくなかったのだった。

ありていに言って、「いっしょに行ってくれない？」というのだった。

\*

健の頭の中には呪いのように居座っているものがあつた。

『未成年者を日没後まで連れまわすと理由の如何なく指名手配うんぬん』という、新城富夢(とむ)氏の言葉だ。

そしてまた、彼は、弟の正弘のように自分より年下の人間には無条件に弱いという傾向があるのだった。その結果、相手から懐かれてしまう。

「そういうわけで、わるいが、ペイリー、オレはレルについていく。未成年者を国外まで連れまわした責任があるからな」

ペイリーはふたりの離脱を残念がったが、心はここにあらず。すっかり翼竜の虜になっていた。

4・「Exciting vacation」

5・「Porta Aurea」へ続く

## あとがき

ペイリーさんは『コッパとレル先生』に登場してた古生物学者のペイリーさんです。あれ。この人、アメリカ人じゃなかったっけ？ いつのまにかオーストラリアンになってる。

彼は先祖に先住民族がいるようで、カヤ&アイラも同じく。《ミッドランタ》は先住民族の言葉です。

『コッパと〜』は、こちらのシリーズのスピノフみたいな作品でして、厳密に繋がってるわけじゃないのです。こまかなことを言いますと(レル先生は結婚しなかったのかとか)キリがないので、あまり気にしないでください。

なお、ブラジルの密輸現場から押収された化石については[こちら](#)をご参照ください。National Geographicの記事です。

2025年3月5日 記

## 奥付

リ・コンストラクション

第四章 Exciting vacation

2025年 3月10日 初版発行

著者 峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材 「[イラストAC](#)」

「[Designer](#)」

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社